

ハバクク書1-3章 「主を信じることの正しさ」

1A “黙っておられる”主 1

1B ユダの中の暴虐 1-4

2B バビロンの暴虐 5-11

3B 悪をもって悪を裁く正しさ 12-17

2A 必ず来る幻 2

1B 見張り所から聞こえる御声 1-4

2B あざけりの声 5-20

1C 略奪 5-8

2C 崩れ落ちる家 9-11

3C 不正と血で築かれた町 12-14

4C 友を酔わせた者 15-17

5C 偶像礼拝 18-20

3A ハバククの祈り 3

1B 怒りの中の憐れみ 1-2

2B 繰り返す御業 3-16

1C パランの山からの到来 3-7

2C 救いの戦車 8-15

3B 静かに待つ悩みの日 16-19

本文

ハバクク書をこれから学びます。さっそく中身に入って来ましょう。

1A “黙っておられる”主 1

1B ユダの中の暴虐 1-4

1:1 預言者ハバククが預言した宣告。

預言書の初めに出て来る、「宣告」という言葉です。これは「重荷」という言葉で、ユダまたバビロンに押し掛かる裁きの言葉、ということです。ハバククについての背景が、何もありません。けれども、彼がどのような時代に生きていたのかは、中身から推測できます。午前礼拝でも話しましたが、時はユダがバビロンによって滅ぼされる直前です。

そしてハバクク、という名前という意味ですが、「喜び迎える」とか「抱擁する」という意味です。彼は自分の名前にふさわしい信仰の表明をしました。最後に、主の約束を喜び迎えて、ユダにおける状況

が最悪になっているのに、それでも主にあって喜び勇みました。ヘブル書の著者が、アブラハム、イサク、ヤコブの信仰についてこのように言いました。「11:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」アブラハムが、自分の妻でさえ不妊であった時に、子孫を夜空の星のようになると約束されたことを、快く受け入れて、その言葉を信じました。主がそうされるのだと信じて、受け入れる時に、その信仰こそが神に喜ばれ、正しいとしてくださるということです。

1:2 主よ。私が助けを求めて叫んでいますのに、あなたはいつまで、聞いてくださらないのですか。私が「暴虐。」とあなたに叫んでいますのに、あなたは救ってくださらないのですか。1:3 なぜ、あなたは私に、わざわざを見させ、労苦をながめておられるのですか。暴行と暴虐は私の前にあり、闘争があり、争いが起こっています。1:4 それゆえ、律法は眠り、さばきはいつまでも行なわれません。悪者が正しい人を取り囲み、さばきが曲げて行なわれています。

ハバククは、この預言書の中で、主に対して訴えます。主が私の祈りを、願いを聞いてくださらないのですか？という訴えをしています。それは御心にかなった祈りでした、イエス様が「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ 5:6)」と言われましたが、彼は主に訴え、主がその訴えに答えてくださる、その回答を聞き、心が満たされます。

彼は、ユダにおいて、またエルサレムにおいてはびこっている「暴虐」について、主に訴えています。ヨシヤ王が早くして死んでしまった後、彼の後に出てきた王たちはみな、「主の目の前に悪を行なった。(2列王 23:32,24,37,24:9,19)」と評価されています。その時代は、アッシリヤがバビロンによって滅ぼされ、ユダがバビロンの勢力の中に置かれていた時でした。けれども南には、大国エジプトが健在です。そこで王たちは、両国を天秤にかけて、どちらに付くかという不誠実な政策を取っていました。このように、神ではなく人の目を気にして、さらに強者にはへつらうのですが、弱者には傲慢にふるまう政治を行っていたのです。このことについて何とかしてくださいと訴えているのですが、神に聞かれているように思えません。主が黙っているかのように、思えてしまいます。

そして彼は、「律法は眠」っていると言っています。イスラエルがイスラエルでいられるのは、主の教えがあるからこそであり、それが全く捨てられていることを嘆いています。ちょうどこれは、教会こそが主の御言葉を証するはずなのに、全く捨てられているということです。ところでハバククは、最後の 3 章にある自分の祈りを、弦楽器に合わせて歌わせています(3:19)。したがって、彼はレビ人であったかもしれません。礼拝における賛美は、レビ人が指揮するからです。律法を教えるのは祭司であり、レビ人でしたから、なおのこと律法が眠っていることに、やるせない思いがしたのだと思われるます。

2B バビロンの暴虐 5-11

1:5 異邦の民を見、目を留めよ。驚き、驚け。わたしは一つの事をあなたがたの時代にする。それが告げられても、あなたがたは信じまい。1:6 見よ。わたしはカルデヤ人を起こす。強暴で激しい国民だ。これは、自分のものでない住まいを占領しようと、地を広く行き巡る。

主がハバククの訴えに対して答えておられます。主は基本的に、ユダの行なっている暴虐を裁く、けれども、それはあなたが驚くような形で、そして信じられない形で行なう、とされています。

まず、「異邦の民」を裁きの器として用いられるということ自体が、驚きです。神の民を裁かれるために、不信者をも神は用いられるということです。そして異邦の民というだけでなく、「強暴で激しい国民」を用いられます。ユダの中における暴虐は暴虐としてありましたが、比べることもできない規模で、狂暴で激しい占領、侵略をカルデヤ人、すなわちバビロンは行なっています。その横暴な占領行為によって、エルサレムを破壊させ、神の正しさを現わすというのです。悪を悪をもって、しかも、はるかに酷い悪をもって裁くということです。

1:7 これは、ひどく恐ろしい。自分自身でさばきを行ない、威厳を現わす。1:8 その馬は、ひょうよりも速く、日暮れの狼よりも敏しようだ。その騎兵は遠くから来て、はね回り、驚のように獲物を食おうと飛びかかる。1:9 彼らは来て、みな暴虐をふるう。彼らの顔を東風のように向け、彼らは砂のようにとりこを集める。1:10 彼らは王たちをあざけり、君主たちをあざ笑う。彼らはすべての要塞をあざ笑い、土を積み上げて、それを攻め取る。1:11 それから、風のように移って来て、過ぎて行く。自分の力を自分の神とする者は罰せられる。

バビロンにとって、法律も秩序も無いに等しいです。自分自身が裁きを行なう、とあります。ダニエル書を学んだ時、ネブカデネザルが自分の夢の解き明かしができないと分かったと、全ての知者たちを殺せと命じたのを思い出してください。そしてその軍隊の姿ですが、ナホム書にも出てきたように、ものすごく敏捷で、あっという間に攻めて来ます。そして「東風」ですが、イスラエルの地域では、東から吹く風は乾燥した熱風です。西からは地中海から出た水分を含んだ風が吹きますが、東はヨルダン、その向こうはアラビア半島の北の部分です、そこから吹いてくる風は、作物を枯らしてしまいます。その苛酷さをもって彼らは暴虐をふるまいます。そしてどんな王たちも、君主たちも、その抵抗、防衛は彼らの前に無に帰します。

ところが興味深いことに、11 節に、「風のように移って来て、過ぎて行く。」とあるのです。どういことでしょうか？バビロンは、古代からある国ですが、帝国としてのし上がったのは、紀元前 625 年のことです。アッシリヤから、ナボポラッサルがバビロンを独立せしめました。そしてアッシリヤの首都ニネベを 612 年に陥落させ、605 年にカルケミシュの戦いで、アッシリヤの残党を破滅せしめました。ナボポラッサルは急死し、息子ネブカデネザルが即位します。その時から、ユダの王たちは捕囚の

運命をたどります。同じ年に、ダニエルなど、王族の者たちの一部が、バビロンと捕え移されます。そして、エホヤキンが即位して、たった三か月でバビロンがエルサレムを攻め、王族や職工などを捕え移しました。紀元前 597 年のことです。そして 586 年、エルサレムの神殿を破壊、町を破壊し、残りの者たちも全て捕え移したのです。ところが、539 年にメディア・ペルシヤの連合軍がバビロンの都に侵入し、バビロンは陥落します。ペルシヤ帝国の初代の王クロスの発令によって、ユダヤ人たちは 536 年にエルサレムに帰還できました。バビロンが独立国となったのは 625 年、そして滅んだのが 539 年です。たった 86 年です！当時の世界を席卷した帝国が、たった 86 年で滅びました。だから、「風のように移って来て、過ぎて行く。」なんです。

なぜ、こんなタイミング良く？ということですが、同じ時期に預言をしていたエレミヤは、ネブカデネザルのことをはっきり、「わたしのしもべ」と言いました。「わたしのしもべバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この国と、その住民と、その回りのすべての国々とを攻めさせ、これを聖絶して、恐怖とし、あざけりとし、永遠の廃墟とする。(25:9)」主が、ユダの民を懲らしめ、彼らがこのことによって主に立ち返るために、立てられたということで、主のしもべなのだ、ということです。彼らは彼らで、主によって裁かれる理由がありました。「自分の力を自分の神とする」ということです。自分が、主なる神に用いられた器にしか過ぎないことを認めず、自分の力をあがめていきました。ダニエル書を見れば分かりますね、ネブカデネザルはその高ぶりによって、理性を失い、獣のようになってしまいました。ベルシャツアルは、主の宮からの杯にぶどう酒を飲み、バビロンの神々を賛美したのです。それで、その日の夜、彼は侵入してきたメディア・ペルシヤ連合軍によって殺され、あつけなく王国が終わってしまいます。

ですから主は、「悪は過ぎ去る」ことを教えておられます。主を求める者たちに、必要な言葉です。それから、「自分の力を信じる」ことの愚かさを教えておられます。これは神をまだ知らない人も、また知っている人にも共通した、神からの警告です。

3B 悪をもって悪を裁く正しさ 12-17

1:12 主よ。あなたは昔から、私の神、私の聖なる方ではありませんか。私たちは死ぬことはありません。主よ。あなたはさばきのために、彼を立て、岩よ、あなたは叱責のために、彼を据えられました。1:13 あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないのでしょうか。なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか。

主がハバククの訴えに答えてくださいましたが、ハバククは、さらに混乱しています。さらに訴えています。初めに、主は聖なる方であるのに、バビロンを正しい裁きを行なう器として用いられるということは、あってよいものなのか？ということです。「私たちは死ぬことはありません。」というのは、ご自分の民を滅ぼすようなことはないということです。そして、神はご自分の民イスラエルを、懲らしめの

ために裁かれることはあっても、滅ぼすことはなく、バビロンをそのために立てておられることを認めています。

けれども、やはり、バビロンが神を恐れずに行なっていること、その悪と裏切りに対して、何も見ないでおられるのか？と問いかけています。ユダは悪を行なっているけれども、比べ物にならないぐらい大きな悪を行なっているバビロンがそれで正しいとされるのか？と問いかけています。「あなたは、あまりにも聖い方だから、あまりにも大きな悪は目に留めることがないのでしょうか。」と少し皮肉も込めて話しているほどです。ある者を裁く時に、より正しい人が裁くことを私たちは願いますね。そうであれば、悪を裁くことはできないと思います。イエス様が姦淫の現場のところで、その女を石打ちにしろと言ったユダヤ人に対して、「罪のない者がまず、石を投げなさい。」と言われたことがあります。けれども、ここではユダよりも罪の重いバビロンが、ユダを裁く器になっているのです。このことに対して、ハバククは自分の理解をはるかに超えてしまったのです。

1:14 あなたは人を海の魚のように、治める者のないほう虫のようにされます。1:15 彼は、このすべての者を釣り針で釣り上げ、これを網で引きずり上げ、引き網で集める。こうして、彼は喜び楽しむ。1:16 それゆえ、彼はその網にいけにえをささげ、その引き網に香をたく。これらによって、彼の分け前が豊かになり、その食物も豊富になるからだ。1:17 それゆえ、彼はいつもその網を使い続け、容赦なく、諸国の民を殺すのだろうか。

バビロンが、まるで人を魚のように、虫のように殺し、虐げています。その背後に、神がおられるということですから、神がそのようにされているのですねとハバククは言っています。それだけでなく、バビロンは魚をとる網を、それに香をたいていると言っています。つまり、先の自分の力を神としているということです。自分の力を誇り、その力を誇示する神をあがめ、拝んでいます。バビロンの数々の神々、その主要なものがマルドゥクですが、マルドゥクがすばらしいということは、自分たちがすばらしいと言っているのと同じです。

私たちは、ハバクク書で、私たちの思いを超えるところの神の主権があり、また神の恵みがあることを学びます。預言者イザヤは、こう言いました。「55:8-9 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。・・主の御告げ。・・天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」私たちがおかしいと思っていること、その思い、また正しいと思っている道があります。しかし、それと全く異なる道を神が示し、違う思いを神が与えられます。だから私たちは戸惑います。全く理解ができません。それでハバククのように訴えます。しかし、イザヤが預言したように、主の思いは天が地よりも高いように高く、主の道も同じように高いのです。主がご自分の思われるままに、ご自分の事を行なわれています。

2A 必ず来る幻 2

1B 見張り所から聞こえる御声 1-4

2:1 私は、見張り所に立ち、とりでにしかと立って見張り、主が私に何を語り、私の訴えに何と答えるかを見よう。

ハバククは主に訴えました。けれども、今、見張り所に立つと言っています。それは、見張り所で、敵が攻めて来る声がほんの少しでも聞こえれば、それを仲間に伝えるのが見張り人の役目であるように、今、どんな小さな声であっても、主が語られるものを決して聞き逃さないとする姿勢です。あまりにも多くの人が、その前に主から聞くことをあきらめてしまいます。主が、まるで自分の思っていること、正しいと感じていることと異なることを許される時に、それをどうしてですか？いつまで、そのままにしておかれるのですか？と尋ねることがない。そして尋ねても、あきらめてしまい、主が何を語っておられるのかを聞くことをやめてしまいます。ヤコブ書には、「1:19 だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」とありますが、人に対してだけでなく、いやそれ以上に神に対して、聞くのに早いものにならないといけません。そうでなければ、神に対して怒ることになりかねません。

2:2 主は私に答えて言われた。幻を書きしるせ。これを読む者が急使として走るために、板の上にはっきり書きしるせ。2:3 この幻は、なお、定めのためである。それは終わりについて告げ、まやかしを言うてはいない。もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。2:4 見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。

主が、答えてくださいました。しかも、はっきりと答えてくださっています。「幻を書きしるせ。」と命じられます。しかも、はっきりと確認できる形で書き記せと言われていています。間違いなく、その通りにするのでと断言しておられます。そして、これが「定めのため」であります。ハバククは、1章2節で「いつまで」と問いかけてました。主は、わたしが定めた時があると答えておられます。ここが、私たち神を信じる者、キリストを信じる者の醍醐味です。神は、永遠の昔から定めておられる計画を持っておられます。そして、その計画を実行に移し、物事を運んでおられるということです。神にとって、何を行なっているか分からないという事態はあり得ないのです。主は、ご自分の行なわれていることを知っておられるのです。

そしてその定めは、「終わりについて」であります。これは、バビロンの終わりとも言えますし、けれども神が、暴虐をやめさせる究極の時、世の終わりの時も表しています。イエス様は、終わりの日について「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っておられます。(マタイ 24:36)」と言われました。父なる神は、いつこの日をもたらすかを、ご自分で定めておられるのです。だから必ず来るし、その定めの日が来たら遅延されることは決してありません。けれども私たちの目からは、遅れているように見えます。そう感じてしまいます。そ

れで神はハバククに、「もしおそくなっても、それを待て。」と言われました。このことを辛抱強く待つのが、主の再臨を待つキリスト者の姿です。

そして、4節は大切な言葉が語られています。心高ぶる者、ユダにいる暴虐を行なっている者、そしてさらに暴虐を行なっているバビロンがいます。そのような中で、正しく生きるのは、いわゆる「正直者は馬鹿を見る」ような気持ちにさせられます。自分が願っていること、その祈りがハバククのように聞かれていないように感じます。自分の主に対してしていることが、虚しいように感じることもさえます。けれども、「正しい人はその信仰によって生きる」と主は、励ましておられるのです。私たちはとにかく、自分がキリスト者としてきちんとやっているか、やっていないかという行為に意識が向きがちです。けれども、主は私たちが正しいとみなされるのは、主がきちんと行われていること、その真実を信じているかどうかで量っておられます。信じがたい時に信じて、待っているかどうか？であります。主が全てを行なわれるし、今も主が何かを行なわれているし、だから私は主から語られたことのみを行ないます、という姿勢です。

2B あざけりの声 5-20

主は、これからバビロンが、自分のしたことの報いを受けることを、はっきり語られます。「ああ。」という言葉が出てきますが、「災いだ」と言い直してもよいでしょう。

1C 略奪 5-8

2:5 実にぶどう酒は欺くものだ。高ぶる者は定まりがない。彼はよみのようにのどを広げ、死のように、足ることを知らない。彼はすべての国々を自分のもとに集め、すべての国々の民を自分のもとにかき集める。2:6 これらはみな、彼についてあざけりの声をあげ、彼を皮肉り、風刺してこう言わないだろうか。「ああ。自分のものでないものを増し加える者。・・・いつまでだろうか。・・・質物でおのれを肥やす者。」2:7 あなたをかむ者が突然起き上がり、あなたを揺り動かす者が目ざめないだろうか。あなたは彼らに奪い取られる。2:8 あなたが多くの国々を略奪したので、ほかのすべての国々の民が、あなたを略奪する。あなたが人の血を流し、国や町や、そのすべての住民に暴力をふるったためだ。

カルデヤ人が酒好きであったことは、古代の資料に記録されています。酒に酔いしれると、そこに表れるのは高ぶりです。ダニエル書 5 章にてバビロンの最後の王ベルシャツアルが、ぶどう酒の杯を神の宮の器を使って飲み、木や石や金や銀で造られた神々に賛美しました。そして、国々をことごとく自分のものにしていく様子を、「陰府」と「死」に例えています。人の死のことを考えてください、火葬場に行けば、とてつもない人々が毎日、死んでいっているのを知ります。彼らがそのようにして、国々のもの、自分たちのものではないものを略奪して行きました。ゆえに、彼らは奪い取られます。自分たちが略奪したので、バビロンが崩壊する時に、略奪されていくのです。

2C 崩れ落ちる家 9-11

2:9 ああ。自分の家のために不正な利得をむさぼり、わざわいの手からのがれるために、自分の巢を高い所に据える者。2:10 あなたは自分の家のために恥ずべきことを計り、多くの国々の民を滅ぼした。あなたのたましいは罪を犯した。2:11 まことに、石は石垣から叫び、梁は家からこれに答える。

バビロンを一つの家にも例えています。自分たちの町を建てるのに、国々を滅ぼし、略奪したものによって建てていますが、その責任が問われないように、ものすごい高い所にいます。あまりにも権力や地位が高いので、だれもその者が行なったことについて、責任追及できないというのはよくあることです。しかし主は、聞いておられます。その家の石垣から声がして、梁が答えています。誰にも知られないのではなく、石垣も家の梁も証人として知っているということです。

3C 不正と血で築かれた町 12-14

2:12 ああ。血で町を建て、不正で都を築き上げる者。2:13 これは、万軍の主によるのではないか。国々の民は、ただ火で焼かれるために勞し、諸国の民は、むなしく疲れ果てる。2:14 まことに、水が海をおおうように、地は、主の栄光を知ることで満たされる。

ここでの災いは、バビロンの巨大な都を、数多くの征服した国々の者たちを使役して、奴隷として酷使して作り上げたものだけでも、それは火で焼かれてしまうということです。

そして、バビロンが倒れることによって、地が主の栄光で満たされるとあります。暴虐をまさに拡散させてきたのがバビロンです。流血と不正が満ちあふれています。黙示録 17 章にある、大淫婦の女バビロンも、聖徒たちの血に酔いしれている姿が出てきました。けれども、主がバビロンを滅ぼされることによって、全地に主の栄光を海の水のように覆ってくださいます。主の知識が世界を覆えば、どうなるでしょうか？その幻を捉えたのが、イザヤです。「11:6-9 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」暴虐とは正反対の、平和が地に溢れます。私たちの間でも、御霊によって主の栄光が満る時に、平和の実が結ばれますね。

4C 友を酔わせた者 15-17

2:15 ああ。自分の友に飲ませ、毒を混ぜて酔わせ、その裸を見ようとする者。2:16 あなたは栄光よりも恥で満ち足りている。あなたも飲んで、陽の皮を見せよ。主の右の手の杯は、あなたの上に巡って来て、恥があなたの栄光をおおう。2:17 レバノンへの暴虐があなたをおおい、獣への残虐があなたを脅かす。あなたが人の血を流し、国や町や、そのすべての住民に暴力をふるったためだ。

主の栄光が地に満ちる代わりに、バビロンの栄光は恥で覆われます。ここでバビロンが行なっている悪は、友、すなわち隣国に悪いものに依存させて、その国をだめにして、そして自分たちがそこを征服するということです。過去の植民地主義にありますね、阿片戦争というのが中国と英国の間にありましたが、麻薬である阿片を中国に英国が売りつけることによって、阿片で人々が廃人になっていきました。中国の役人が、阿片の売買をする者を厳しく罰するという法律にしたがって、阿片を没収し、捨てたところ、英国が怒り、当時の中国、清に対して戦争をしました。そして、英国、イギリスが香港島を占領したのです。バビロンは、当時、そのように国々に対して行なった結果、今度は自分たちの恥が露わにされます。「陽の皮」というのは、男性器の包皮のことです。割礼を受けていない包皮を見せることになる、という、ものすごい屈辱的なことであります。

そして「レバノンへの暴虐」のことが書かれていますが、そこでは杉の木を不必要に切り倒し、また獣も殺していきました。人だけではなく、動物や自然に対しても残虐な行為を働きました。

5C 偶像礼拝 18-20

2:18 彫刻師の刻んだ彫像や鑄像、偽りを教える者が、何の役に立とう。物言わぬ偽りの神々を造って、これを造った者が、それにたよったところで、何の役に立とう。2:19 ああ。木に向かって目をさませと言ひ、黙っている石に向かって起きろと言う者よ。それは像だ。それは金や銀をかぶせたもの。その中には何の息もない。2:20 しかし主は、その聖なる宮におられる。全地よ。その御前に静まれ。

最後の、「ああ」すなわち「災いだ」は、偶像礼拝です。自分たちの欲望や権力を表象する偶像ですので、基本的に自分自身を拝んでいると言ってよいでしょう。私たちは心の中で偶像を造っていきます。そして造られたものがあって、それに仕えて行きます。自分の地位やお金は、何でもそうですが、それに仕えていくとその奴隷となり、自分を卑しめることとなります。そして大事なものは、困った時の神頼みというのは、存在しないのだということです。まことの神を、自分の心の中にある偶像によって拒むのですが、自分にとって何も頼るべき者がいないことが分かったとしても、そこに助けを求めることができないのです。そんな力がないし、知恵もありません。

そして、主がはっきりと、「しかし主は、その聖なる宮におられる。」と言われます。これは、天にある宮、主が王座に着いておられるところです。ここにこそ、まことの神がおられ、私たちが仕えるに値する方がおられます。そして主は、「全地よ。その御前に静まれ。」と言われます。バビロンだけでなく、あらゆる諸国民にとって、彼らはそれぞれ自分の国の神々がいるのですが、それらは虚しいものだ、この方の御前で静まれと言われるのです。あらゆる人々に、主なる神を礼拝することができることを知っていただきたいですね。政治や財界の方々にも、キリストを主として信じ、礼拝している方々います。また下請け会社で、土木業を営んでいる人々でも、礼拝をしている人々があります。あらゆる人々が、聖なる宮におられる方、主をあがめて、静まってくれたらなあと思います。

3A ハバククの祈り 3

このようにして、完膚なきまでにバビロンを滅ぼしてくださる幻を、主はハバククに与えられました。主は、ハバククが願っていた以上に、その願いを聞いてくださっていたのです。すなわち、バビロンはユダを裁く器にしかすぎなかった。バビロンの悪を容認し、放置されるなんていうことは、全く考えておられなかった。むしろ彼らが、行なっている暴虐に応じて暴虐によって滅ぼすことをお考えになっていた。午前礼拝でも少しお話ししましたが、主は余裕のある方です。ご自身の向かって、反抗する王たちが終わりの日に出て来るのですが、詩篇第二篇によると、「天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。(4節)」とあります。主は、余裕を持っておられるのです。私たちは、一時的なことでどうしてもがっかりしがちです。その途中経過しか見ていないから、がっかりしてしまうのです。しかし、主は、ちょうど獲物に食らいついている魚を釣るように、なるべく餌を食べさせるようにします。私たちは、餌をただ食べている魚しか見えずに、「主はいつまで、こんなことを許しておられるのか？」と思うのですが、主はご自分の時を定めておられ、その時が満ちる時に釣りあげられるのです。

その心が分かったハバククは、祈りを捧げます。しかも、弦楽器を使って、音楽を付けてそれを歌にするようにして、祈ります。3章1節に「シグヨノテに合わせて。」とありますが、ちょうど詩篇にある調べと同じです。祈りであると同時に、主をあがめる賛美にもなっています。

1B 怒りの中の憐れみ 1-2

3:1 預言者ハバククの祈り。シグヨノテに合わせて。3:2 主よ。私はあなたのうわさを聞き、主よ、あなたのみわざを恐れました。この年のうちに、それをくり返してください。この年のうちに、それを示してください。激しい怒りのうちにも、あわれみを忘れないでください。

ハバククは、バビロンに対する神のなされることを聞きました。それに身震いがするほどです。「この年のうちに」と言っていますが、この年は複数になっています。近いうちに、早く行なってくださいということです。これは私たちが、「主よ、来てください。(1コリント 16:22)」と願う、主が戻って来られる願いと似ています。その幻があまりにも鮮やかなので、「それをくり返してください」とまで言っています。ハバククにとって、バビロンの破滅を一度、先んじて体験してしまったようなものです。試写会で映画を観て感動した人が、「ぜひ必ず上映してくださいよ。」と頼んでいるようなものです。もう上映が決まっているから試写会があるのですが、けれどもその感動を伝えています。

そしてハバククは、もう一つの願いをしています。「激しい怒りのうちにも、あわれみを忘れないでください」というものです。これはすばらしい、祈りです。ハバククは、これからユダがバビロンによって裁かれることを受け入れています。神の怒りが現れます。けれども、その怒りは一時的なものであり、主が彼らに幸いな計画を立てておられることも知っています。それで、怒りの中にも憐れみをと祈っているのです。主が怒りを示されることと、憐れみに深いことは矛盾しません。むしろ、主は御怒りを

示している時でさえ、何らかの形で憐れみも示しておられるのです。神は、憐れみ、また気を変えて怒るということではなく、怒るにおいても憐れみを忘れていない方なのです。

2B 繰り返す御業 3-16

ハバククは、これから主が、かつて行なわれた偉大な御業、力ある御業を思い出します。そして、主が同じようにしてバビロンにもご自分の力を表し、栄光を示してくださることを期待しています。そしてこのハバククの祈りが、将来、終わりの日に主が行なわれることをも投影させています。先ほどハバククは、「繰り返してください」と祈りました。主は真実な方です。過去にご自分の民のために行なってきた時に示された真実があります。同じように、将来においても真実を示してくださいという願いを込めています。

1C パランの山からの到来 3-7

3:3 神はテマンから来られ、聖なる方はパランの山から来られる。セラ/その尊厳は天をおおい、その賛美は地に満ちている。3:4 輝きは光のよう。ひらめきはその手から放たれ、そこに力が隠されている。3:5 その御前を疫病が行き、熱病はそのうしろに従う。3:6 神は立って、地を測り、見渡して、諸国の民を震え上がらせる。とこしえの山は打ち砕かれ、永遠の丘は低くされる。しかし、その軌道は昔のまま。3:7 私が見ると、クシャンの天幕は乱れ騒ぎ、ミデヤンの地の幕屋はわなないている。

主がかつて、天の御座から降りてこられて、イスラエルの民に現れてくださったことがありました。シナイ山にご自分の栄光と力を現わしてくださった時のことです。「テマン」というのは、エドムの国にある町のことです。「パラン」は、シナイの荒野の北にある荒野であり、モーセが荒野の旅をした時の通過点です。主は、シナイ山に下られ、それから火の柱、雲の柱で臨在して下さり、イスラエルの民を無事に、ヨルダン川の東岸にまで導いてくださいました。その時にエドムの地も迂回しましたが、通って行きました。5 節の疫病とは、エジプトで主が災いとして下された疫病のことを話しているのでしょう。そして「クシャン」や「ミデヤン」は、シナイ半島やアラビア半島に住んでいる遊牧民です。彼らは、イスラエルの民が通っていくことについて、主の偉大な力について恐れおののいたのです。この言い回しは、ハバククが考え出したものではありません。かつてモーセが死に前に民を祝福した時に使った表現です。「申命 33:2 主はシナイから来られ、セイルから彼らを照らし、パランの山から光を放ち、メリバテ・カデシュから近づかれた。その右の手からは、彼らにいなずまがきらめいていた。」

けれども、必ずしもイスラエルの民の荒野の旅には、合致しない表現があります。「とこしえの山は打ち砕かれ、永遠の丘は低くされる。」ということです。このような地殻変動が、当時起こったという記録は、民数記にありません。これが、霊的にはその通りでしょう。山というのは、しばしば王たちの権威や力を示しますから。けれども、ここに主が終わりの日に行われること、天から再び戻られることについての教えが隠されているのです。他の預言書、イザヤの預言には、主が天から戻って来られる時にエドムにあるボツラで、敵どもに戦われ、それからエルサレムに現れることを教えています。イザ

ヤ書 63 章などに、それが書かれています。おそらく、主はかつてシナイから現れましたが、再臨の時もその方面から現れ、そしてエドムのボツラにいる世界の軍隊に戦われることだと思います。そして、天変地異が起こります。大規模な地殻変動が起こります。イエス様がオリーブ山に立たれると、南北にオリーブ山が分れることがゼカリヤ書 14 章に書かれています。

そして、「その軌道は昔のまま。」とあります。山々が動いたとしても、それでも主ご自身が何ら影響を受けずに変わらないことを意味します。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。(ヘブル 13:8)」

2C 救いの戦車 8-15

3:8 主よ。川に怒りを燃やされるのですか。あなたの怒りを川に向けられるのですか。それとも、あなたの憤りを海に向けられるのですか。あなたは、馬に乗り、あなたの救いの戦車に乗って来られます。3:9 あなたの弓はおおいを取り払われ、ことばの杖の誓いが果たされます。セラ/あなたは地を裂いて川々とされます。3:10 山々はあなたを見て震え、豪雨は流れ去り、深い淵はその声を出し、その手を高く上げます。3:11 太陽と月はその住みかにとどまります。あなたの矢の光によって、あなたのきらめく槍の輝きによって、それらは動きます。

主がシナイの山で天から降りてこられて、それから約束の地に入って、ヨシュアたちの軍隊の前で戦って下さいました。ここは、天から降りてこられて、そして地上にいる反対勢力に戦って下さる主の偉大な力を示しています。8 節の川とは、ヨルダン川のことです。また出エジプトの時も、紅海を分けて、そこを乾いた地にしました。そして、主が馬に乗られて、民の救いのために戦われている姿を見せています。9 節には、弓の覆いとありますが、プロテクションを外した状態です。そして、「ことばの杖の誓い」というのは、後に諸国の民を治めるための杖であり、ことばをもって力をもって治められるということでしょう。そして、9-10 節にある、洪水のように川が流れ出ていくことについては、デボラとバラクの戦いで、カナン人の將軍セラに対して、その戦車が身動きできなくなるようにするために、キシオン川を氾濫させました。

そして 11 節は川ではなく、太陽と月のことです。これはもちろん、ヨシュアが、月よ留まれ、太陽よ、留まれと言った時に起こったことです。

3:12 あなたは、憤って、地を歩き巡り、怒って、国々を踏みつけられます。3:13 あなたは、ご自分の民を救うために出て来られ、あなたに油そそがれた者を救うために出て来られます。あなたは、悪者の家の頭を粉々に砕き、足もとから首まで裸にされます。セラ 3:14 あなたは、戦士たちの頭に矢を刺し通されます。彼らは隠れている貧しい者を食い尽くす者のように、私をほしいままに追い散らそうと荒れ狂います。3:15 あなたは、あなたの馬で海を踏みつけ、大水に、あわを立たせられます。

主が国々を踏みつけられる、という言葉ですが、これは過去の出来事で見ることができません。しかし、主が馬のようになって戦ってくださり、彼らを救い、また彼らの油注がれた者、キリストが救い主として現れるように来てくださいます。バビロンが陥落した時に、この出来事は起こりませんでした。海が踏みつけられるというところが、あえて、バビロンにはユーフラテス川の支流が流れていて、バビロンの都がユーフラテス川の支流の中に浮かんでいるような感じに、上空から見えるような感じなので、そう比喩的に表現してもよいかもしれませんが。しかし、これらは明らかに、終わりの日に主が戦うために戻って来られることを、直接、予告しているものです。イスラエルの民が、天の四方に散らされています。そして彼らを救うために、主が戻ってこられます。世界の軍隊は、イスラエルにいるユダヤ人を反キリストが率いているので滅ぼそうとするのですが、主が急いで戻って来られて彼らに、口から出る言葉の剣によって打ち滅ぼされます。ゼカリヤ書の 12 章と 14 章、そして黙示録 19 章に詳しく書かれています。

ですから、ハバククは、主が過去に行われた偉大な力ある業を思い出し、主は真実な方ですから、必ずそれをバビロンにも現わしてくださることを信じています。そして主は変わらない方ですから、終わりの日にこのことを行なわれます。天から栄光をもって降りてこられます。そして、白い馬に乗られて、敵どもに戦ってくださいます。

3B 静かに待つ悩みの日 16-19

そしてハバクク書のクライマックスです。ここからが、信仰の骨頂です。

3:16 私は聞き、私のはらわたはわななき、私のくちびるはその音のために震える。腐れは私の骨のうちに入り、私の足もととはぐらつく。私たちが攻める民に襲いかかる悩みの日を、私は静かに待とう。

主が確かに、自分の訴えに答えてくださいました。それを聞いて、バビロンに悩みを与える日、バビロンを攻める日のことを思って、はらわたが戦慄くほどです。幻として、それを見させられたので、唇もその音で震えていると言っています。体もかなり衝撃を受けています、腐れが骨に入り、足元がぐらついています。しかし、それを「静かに待とう」と言っています。そうです、これまでは訴えていたのですが、そのような声を上げず、静かに待つのです。これは、素晴らしいことです、私たちは、主が全てのことを行なわれているのだということを信じて、静かに待ちます。たとえ、恐ろしいことが世の中ではびこっていても、主がその悪の勢力を絞め殺す時が来るのですから、静かに待つのです。

3:17 そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。3:18 しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。

ここに、驚くべきハバククの姿勢を見ることができます。彼の名の通り「喜び迎える」信仰です。今、

起こりつつあるのはユダの地における飢饉です。いちじくの木、ぶどうの木の実、オリーブの木、畑それぞれが実を結ばせません。家畜もいなくなります。これらのことが起こって、それでバビロンがユダを攻めます。主が、このようにしてユダに対する裁きを行なわれることを、静かに見えています。しかし、それはあくまでも、バビロンに対して攻めてくる者たちがやって来るという、究極の裁きの通過点なのです。このようにして、すべて確実に神のご計画通りに動いていることを、今は知っています。先の先を見て、それで主がなされていることを喜んでいなのです。

この「喜び勇む」という言葉は、歓声を上げて、喜び踊っている姿です。ちょうど接点で争っている自分の応援するチームが制限時間ぎりぎり最後の一点を入れることができた時、飛び上がって喜ぶ、そんな喜びを表すヘブル語が使われています。これが信仰によって生きる者たちが持っている、大いなる恵みです。とてつもない酷い状況の中にいながらにして、喜ぶことのできる力が与えられることです。この秘訣は、一つの言葉に隠されています。「主にあって」です。食べ物がことごとく無くなっていることを彼は喜んでいるわけではありません。もちろん、これらは依然として悲しいことです。そうではなく、主の中で喜んでいるのです。主が与えてくださる救いの中で喜んでいるのです。その喜びは、いわゆる「幸せ」のような環境や状況に拠っているわけではありません。

3:19 私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。指揮者のために。弦楽器に合わせて。

いま説明した、悪い状況の中でも喜んでいられる人を高い崖を平気で駆け上っていく「雌鹿」に例えています。この前、ナホム書で話しました。主が悪に対して報われる、復讐されることを信じて受け入れるならば、主の勝利から私たちは出発できます。圧倒的な勝利者になることができます。そして、主に命じられたことを行なうことができます。それで、鷲がアルプス山脈を自由自在に富んでいるように、私たちも主を待ち望む中で、自由になることができます。ここでは、それを、何も障害も感じず岩を上っていく雌鹿に例えているのです。このような勝利と余裕を私たちに、神は備えてくださっています。

そして、最後にハバククは、これを弦楽器に合わせて、指揮者のために残している、と言っていますが、先ほども言いましたように神殿礼拝の賛美に用いるためです。すばらしいことでしょう。この信仰は単に理論的、知的に受け入れるだけでなく、歌にして心の柱に沈みこませる必要があるからです。